

キラリ★話題の「ひと」



小林 隆宏さん
(高萩町)

○プロフィール

昭和48年生まれ
宇都宮市出身、佐野市在住
宇都宮短期大学附属高校調理科卒
「佐野らーめん晴れる屋」店主

佐野らーめん予備校出身者が ラーメン店を開店

料

理をすることが好きで、「いずれは自分の店を持ちたい」と思っていた小林さん。高校でも調理を学び、その後、横浜中華街で13年間修行。きつとさまざまなご苦労もあったことと思います。さらに、栃木県内のホテルの中国料理担当で14年、うち料理長として4年の勤務経験があります。

ただ、当初より開店、独立への思いは強く、両親が新聞に掲載された「佐野らーめん移住プロジェクト」(現 佐野らーめん予備校)の記事を見つけたことから、小林さんも興味を持ち、応募したそうです。

コロナの影響で、調理実習以外の研修はリモートでの受講などが主になりましたが、無事に研修を修了。今年の4月3日(土)に開店の運びとなりました。店の場所は、予備校スタッフがいろいろと探してくださった結果、物件を見つけてくれたそうです。小林さんは、このことが「大変ありがたかつ

た」と話していました。

初めは開業の道に進むことを、小林さんのご両親も大変心配していたようですが、開店にこぎ着けた今は、とても喜んでくれ、しばしば来店してくれているとのこと。また高校時代の恩師も、来てくれます。今の生活についても小林さんに聞くと「充実してとても楽しい」と話してくれました。

後継者育成を掲げるらーめん予備校出身の小林さん。高齢社会の今、農業、林業、商工業などさまざまな分野において後継者不足は深刻です。それだけにこうして、後継者育成が図られることの意義はとても大きいと感じました。

(市民記者 福田満)



市長からの メッセージ

初登庁から約1カ月が経ち、緊張感を持ちながら慌ただしく業務や面会、総会などをこなしています。

就任時の職員幹部への訓示の中で、皆さんを家族の一員として考えているので、忌憚なく意見や相談をしてもらいたい。また、激しい市長選の後ということで融和を図ることが喫緊の課題であることから、人事については当面動かさないとのことにも触れました。そして、職員には能力を最大限に発揮してもらい行政サービスの向上に向け寄与してもらおうことが市長の責務であるため、市政発展、「進化する佐野」に向けて一緒に取り組んでもらいたいと強く伝えました。

次に新型コロナウイルス感染症対策ですが、市民の皆さんには今日まで感染拡大予防対策等、ご不便をお掛けしながらもご協力をいただいております。改めて感謝申し上げます。

いよいよワクチン接種が本格的に始まります。まずは医療従事者から高齢者へ、そして一般の方へと進めてまいります。が、一般枠では福祉施設関係者や教員、幼稚園や保育園などの関係者に優先的に接種を行うことで皆さんの不安の解消に繋がっていきたいと思っています。

新型コロナウイルス感染症の収束には市民の皆さんや医療従事者の皆さんのご理解とご協力が不可欠でありますので、今後もよろしくお願いいたします。

(5月14日 記)

金子 裕

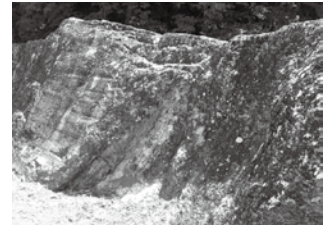


唐沢山の魅力

う ぐいすの音が聞こえ、新緑のまぶしいゴールデンウィーク。唐沢山頂にほど近い遊歩道を歩いてみました。

国指定史跡である唐沢山城があり、戦国時代には、この城を巡って何度も戦いがあったそうです。山頂付近には、上杉謙信が唐沢山城を攻めたとき、西日が反射して攻めることが困難だったと言われている鏡岩があります。この鏡岩からの遊歩道は木漏れ日にあふれていました。そして、所々に遠くまで見渡せる場所があります。佐野市街地方面から唐沢山の頂上につながる県道や北関東自動車道、そして、群馬の山々を望むことができます。遠くまで見渡せるので、自分が空を飛んでいるような気分になりました。

自然、歴史、癒やしとたくさんの魅力あふれる唐沢山で、これからも自分の楽しみを見つけていこうと思います。(市民記者 尾島民江)



▲鏡岩



▲木々の間から見える北関東自動車道

トロロアオイの種まき

5 月13日(木)、佐野市立あそ野学園義務教育学校の3年生は、市むらづくり推進協議会会長の横塚順一さんを講師に迎え、飛駒和紙の原料となる「トロロアオイ」の種まきを行いました。「飛駒和紙」の歴史は古く、江戸時代から伝わる本市の伝統的な和紙です。丈夫で長持ちすると評判で、古くから障子紙や傘紙などに利用されており、同校では卒業証書にも使われています。

種まき当日は、横塚さんから「トロロアオイの根っこが飛駒和紙の原料となる」など飛駒和紙の作り方を教わった後、校内にある「さわやかロード」付近に置かれたプランターに、子どもたちがトロロアオイの種撒きをしました。今回植えたトロロアオイは、8～9月にかけて綺麗な黄色い花を咲かせ、12月には和紙に使う根っこが収穫できるそうです。「来年3月の卒業証書には子どもたちが植えたトロロアオイを使いたい」と横塚さんは笑顔で話してくれました。



佐野弁 ばんざい

いのししの習性や行動などを表す方言 および狩猟用語のいろいろ

いたずらする獣けものは多いが、近年、特に田畑を荒らし回り、作物を食い散らしているものに、いのししがいます。農家の人はこのいのししに困り果てています。他の動物とちがって特殊な習性を持ち、独特な行動をします。このような習性や行動を表す用語や方言は、現在でも数多く残っています。昔からその土地に住む人たちは、そのような用語や方言を使って生活してきたからです。では、今日でも知られている語について取り上げてみましょう。

「マケツチシ(いのししの群れ)が田んぼや畑にヒヤツテ(入って)さあ、イモ(里芋)やじゃがたらなんかを食い荒らしたり、土手どてをホックリケーシ(掘り返し)て、土や石ツコを掘り出すなど、ろくなコター(ことは)シネンだよね。みんな鼻の力でいたずらするんだってガネ。めめずやケーロンゴ(蛙)や草の根っこなんかを掘り出して食うんだってさ」

いのししのこうした害を少なくするために、昭和の初め頃、野上地方では狩猟やわな以外に、落とし穴を掘って、そこにオツコドシ(落として)捕獲したそうです。これをシシオシ(おし)といいます。日中は、山の中腹の草のあるイネバ(寝床)で、いのししはじっとして休んでいます。夜、自動車から、山際の道路わきにいのししや鹿ンボがじっと立っている姿を見ることがあります。これらの動物は夜行性なのに、朝でも晩でも活動します。夕方になると、ヤタ(湿田)のようにどろどろした湿地で、泥をかき回し、ホツパ(泥浴び)をします。寄生虫を取り除くためだといわれています。いのししも鹿ンボも、早く田畑から姿を消してもらいたいものですね。

(市民記者 森下喜一)

